



森永卓郎
〔経済アナリスト〕



安いニッポン
「価格」が示す停滞

中藤 玲 著

日本経済新聞出版本部
935円
装丁/ペタールデザイン

薄々気づいている人も多いと思うが、世界から見ると、日本の物価はとてつもなく安くなっている。本書は、日経新聞記者の著者が、日本の低物価の実態とその原因、さらには今後どうしたらよいのかをまとめた書籍だ。

ダイソーの百円商品、マクドナルドのハンバーガーに始まって、回転ずしからデイズニールランド、アマゾンプライムなどのサービス料金に至るまで日本の物価がいかに安いかを本書は冒頭で紹介する。具体的な国際比較の数字を突き付けられると、本当に驚く。

なぜそんなに安いのか。物価は二つの側面が決まる。一つは需給関係だ。日本は、かれこれ四半世紀近くわたってデフレを続けてきた。デフレのなかでは、売り上げを確保するための値下げ競争が繰り返される。それが、日本の

発展途上国に転落した「とてつもなく安い日本」

低物価の基本的な原因だ。ただ、物価はコストの積み上げで決まるといふ側面もある。本書が重視するのは、その点だ。日本では、最大のコストである賃金がまったく上がっていない。実際、かつてG7トップだった日本の賃金は、いまや韓国にも抜かれる始末だ。それが物価安の原因になっているのだ。

問題は、なぜ賃金が上がらないのかということだ。本書は、生産性が上がらないからだとしている。それは正しい。付加価値が増えなければ、賃金を増やせない。それでは、なぜ生産性が上がらなかったのか。私は、産業政策の失敗だと思ふ。かつて日本の家電産業は、世界最強だった。しかし、いまや国産のスマホやパソコンを使う人は少数派になってしまった。

物価安は、日本が発展途上国に転落したことを意味する。インバウンドはあるが、日本人は海外旅行に行けなくなる。優秀な人材は海外流出し、大部分の日本人は、海外企業に安い賃金で雇われるしかなくなる。

それをどう防げばよいのか。著者は断言を避け、複数の有識者のインタビューに委ねている。その意見はさまざまだ。ぜひ本書を読んで読者自身が考えて欲しい。



平山周吉
〔雑文家〕



検閲官
発見されたGHQ名簿

山本武利 著

新潮新書
880円
装丁/新潮社装幀室

この人に訊け!

タイトルではわかりにくいですが、「日本人GHQ検閲官」という秘匿された存在の実態報告書である。占領下、GHQは憲法違反などものともせず、新聞、出版、郵便などの検閲、電話の盗聴を何喰わぬ顔で行なった。その仕事に雇われた日本人は二万人とされる。そのうちの六七九四人の名簿(ただしローマ字表記なので漢字は不明)を発見し、そこから辿って、当時の彼ら彼女らがどんな待遇で、どんな仕事をし、後々、その仕事にどんな思いを抱いていたかを徹底調査したのが本書だ。コンパクトな新書判に盛るには余りにも惜しいが、中身はギョッと詰まった執念の書である。

英語遣いゆえに占領下で厚遇に恵まれたエリートたちなので、戦後日本で中核的な地位についた人間も少なくない。よくぞこれだけ

占領下ニッポンで厚遇に恵まれたエリートたちの証言

探し出したといっている多くの名前が本書では明らかにされている。後に朝日新聞社に就職する渡辺横夫は、「敗戦国の男子が、国民と占領軍の間に身を投じて、当座の暮らしをたてようとした立場への自己批判」の沈鬱な空気を感じたという。渡辺は自らの「痛み」を毎日新聞のインタビューで語った。語る人語らぬ人、罪悪感を感じて人感しない人と、人はさまざまである。証言がたくさん集まるにつれ、占領下日本人の意識が厚みをもって見えてくる。「国会の爆弾男」榎崎弥之助、ポランド語の大家・工藤幸雄、国際政治学者・神谷不二などは「感じない」派、推理小説作家の鮎川哲也、言語学の大家・河野六郎などは「うしろめたい」派だ。採用試験を受けたが英語が出来ずに不採用となった思い出を随筆に書いた吉村昭のような人もいる。

著者の山本武利が「緘黙派」と分類した大物に「キノシタ・ジュンジ」がいる。あの『夕鶴』の劇作家・木下順二である。シェイクスピアを訳した英語の達人、著名な進歩的文化人の木下はたまた、「緘黙」の代償に、戦争裁判批判の問題劇『神と人のあいだ』を書いたといえる。ダンマリを決め込むことは不可能だったのだ。

「この人に訊け」本の選者たち (50音順) 嵐山光三郎 (作家)、井上章一 (国際日本文化研究センター所長)、岩瀬達哉 (ノンフィクション作家)、大塚英志 (まんが原作者)、香山リカ (精神科医)、川本三郎 (評論家)、鴻巣友季子 (翻訳家)、関川夏央 (作家)、平山周吉 (雑文家)、森永卓郎 (経済アナリスト)、山内昌之 (武蔵野大学特任教授)、与那原恵 (ノンフィクションライター)